言葉の文芸を次代につなぐ
―現代の語り活動から考える・第七〇回研究例会より―

杉浦　邦子

一　はじめに

昔話は、幾世代にも亘って、口から耳へ、耳から口へと語り継がれてきた言葉の文芸だと、誰もがそう理解していた。しかし、民俗的な生活文化がなくなった現代社会では、その再生産ができなくなったと理解してよいのではないだろうか。現在でも、祖父母から孫たちに、父母から子どもたちに語られた昔話を、数十年の歳月を経て聴いたとおりに語る語り手はおられる。多くは、素晴らしい語り手である。

小論においては、論を進める便宜上、右のような語り手を「伝承の語り手」と呼び、その語りを「伝承の語り」と呼んでおく。

しかし、もはや、従来と同じように、語り継がれることは望めない。何故なら、語りの場は、日々の暮らしの中心であった囲炉裏端ではなく、生業の場でもない。藁や食べ物の匂いを嗅ぎながら、爺婆の肌を感じる膝の中で聴くのではない。昔語りは家の中で居場所がなくなった。

それは、高度経済成長期、日本の庶民の暮らしが一変した時からといえよう。一九五五年頃から一九七三年頃である。

一方、この頃新しい装いの語りがこの国にもたらされた。図書館児童室のサービスの一環として、その理論と実践が、図書館先進国アメリカから伝えられたのである。子どもに読書欲を持たせ、しかも優れた作品を読むように導くには、祖先の文化遺産であり、文学の基礎である民話を話して聴かせることが大切であるという理論と実践が紹介され[1]、意欲的な図書館員たちがこれを学び始めた。当初、「話して聴かせること」を英語をそのまま片仮名にしてストーリーテリングといっていたが、徐々に「おはなし」という言葉を遣うようになっていく。（今でもストーリーテリングという場合もある。）

耳から聴いて心や身体の中に記憶された昔話を持たない人が昔話を語るためには、昔話の本を読んでこれはという昔話に出合うと、しっかり覚えて、自分の言葉にしなければならない。

努力と苦労を伴う過程を経て、幾つかの昔話＝「おはなし」をすっかり覚えてしまったら、仲間の語り手（後述するように、個として活動することは滅多にない）に聴いてもらう。うまく語れたら子ども達に聴かせることができる。昔話を語り＝聴く場は、「おはなし会」という会場である。数人から数十人の聴き手が座ったり、腰掛けたりして、中央に居る語り手に向き合って座を占める。語り手は聴き手の顔を見ながら、肉声で語る。

右のような語り手を、やはり便宜上「現代の語り手」と呼び、その語りを「現代の語り」と呼ぶこととする。

図書館員が「おはなし」について学び始めた時期は、子ども文庫[2]が誕生し始めた頃でもあった。「おはなし」の実践は、子ども文庫の活動と切り離すことはできないので、ここで、子ども文庫にも触れておきたい。

子ども文庫は、地域の子ども達に読書の喜びを知る場所を整えたいと願う大人、多くは母親達が運営に携わっていた。本の貸し出しの他、読み聞かせや子どもとの触れ合いも大切にしていた。一九七〇年代は、子ども文庫の高揚期ともいわれ、うねりのような勢いで全国に広がり、大勢の子どもが文庫に集まったが、八〇年・九〇年代には、文庫に来る子どもの数が減少してきた。「全国子ども文庫調査報告書」[3]によれば、一九九三年現在でも文庫数は最盛期と余り変わらない四千を数えたといわれるが、今世紀に入ってからは相当減少していると思われる（全国調査のデータはない）。多くの自治体で公共図書館が開設され、文庫の役割は終えたとの考えがある一方で、地域の子ども達の集う場所として存続している文庫もある。「おはなし会」を充実させたり、若い母親と幼児対象のわらべ歌や読み聞かせを行って地域の子育て支援的役割を担っている文庫もある。

子ども文庫に関わるうち、「おはなし」に関心を持ち、子ども達に昔話を聴かせたいと考える人々が出てきた。図書館員と一緒に「おはなし」の講習会で学んだ人達が、当初は都市部で語り始め、やがて全国に浸透していった。「現代の語り手」達は、今もほとんどが女性でボランティア活動である。子ども文庫活動の担い手と通底するのは、地域の子どもへの思いであろうか。

「現代の語り手」達はグループに属して、地域に根ざした活動をしている。グループの構成員は十数人から数十人、複数のグループに属している人もある。グループは、「おはなし」の質を高める学びの場であり、活動を円滑に進めるための母体でもあり、仲間で支え合って運営される。現在、語りのグループは、全国で七千グループ以上はあるのではないだろうか[4]。全国ほとんどの図書館をはじめ、子ども文庫・児童館や放課後の公的施設、学校や幼稚園・保育園などの他、老人施設でも「おはなし」を聴く場「おはなし会」が持たれている。公立の学校は、当初は「おはなし」ボランティアを容易に受け入れようとしなかったが、二〇〇〇年の「子ども読書年」、翌年「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定されてからは、門戸が広くなったという。むしろ要望が多過ぎて、語り手が応じきれない場合も

あるようだ。

一方、昔語りが伝承されてきた地域にあっても、民俗文化である昔話を受け継ぎ、後世に伝えていこうという機運が高まり、「民話（昔話）の会」が結成されている。三〇年程前からである。語り手と聴き手、会員同士の交流をはかりながら目的を達成しようとしている。会の名称は、必ずしも、地名を冠して「民話の会」と命名されているわけではないが、そのような会が多いことと、昔話伝承の土地に起こった会としてわかりやすいので、以下一般化して使用することをお断りしておきたい。佐藤晃氏による山形県の「県内民話の会の現況に関するアンケートの結果報告」[5]によれば、山形県内には二〇一六年現在、「民話の会」が三十以上あり、会員は四百名以上という。民話が豊かにあった東北地方の他の県や新潟県、西日本の民話の会については把握していない。相当数あり、そこでの会員数―全てが「伝承の語り手」とはいえないが―もかなりであろう。

「民話の会」でも、子ども達が昔話を語り＝聴く時の座のしつらえ方、語り手と聴き手の対座の仕方は、「現代の語り」の「おはなし会」とほとんど同じである。つまりは、現代社会の中に共に組み込まれている。

昔話は、本来、語って聴かせる言葉の文芸である。現在行われている耳から聴いた声の文芸は長い年月記憶されるだろうか。家庭の中で毎晩聴くのではなく、「民話の会」や「おはなし会」で聴く子ども達は、将来、子ども時代に聴いた「おはなし＝民話」を思い出して子どもや孫に語ってみようとするだろうか。この問題を考えるために、シンポジウム形式で三人の方から、それぞれの現状を報告していただいた。

「伝承の語り手」の立場から「新庄民話の会」の渡部豊子氏、「現代の語り手」の立場から「當麻おはなしろうそくの会わらべ」の大西登貴子氏、研究者の立場から高千穂大学の立石展大氏にお願いした。次に発表の要旨を述べる。

二　「伝えたい、祖母の民話と生きる知恵」
渡部豊子氏の報告

渡部豊子氏は、山形県最上郡萩野村（現新庄市）に生まれ育ち、結婚後も同市にお住まいである。子どもの頃に父方の祖母から沢山の昔話を聴いて育てられた。幼い子ども心に、頭の上から祖母の昔話がきこえてきて、昔話は絵になって想像の世界に留まっているので、語るときは自分の描いた絵を語っているのだという。祖母は、豊子さんが九歳の時亡くなったが、昔話を通して孫娘を躾け、おなごの心得から他人を思いやる気遣いや人の道をも教えようとしてくれたと考えておられる。「子供の記憶の中に固定するのは、単に昔の事実ではなくて、昔のあり方、考え方なのである」[6]という、本学会第三九回大会におけるシンポジウムでの花部英雄氏の言葉に繋がる。渡部氏が昔話を聴いたのは高度経済成長が始まる以前、長く培われてきた民

俗文化が遺っていた時代である。『昔話と村の暮らし―山形県最上郡旧萩野村』（二〇〇五）を著して、昔話は、年中行事や暮らしと共にあったことを明らかにしておられる。渡部氏は、一九八六年に発足した「新庄民話の会」の初めからの会員である。会の様々な事業のうち、子どもへの伝承活動にしぼって次のように報告された。

会発足当時はまだ、明治・大正生まれの「伝承の語り手」達も元気で、新庄・最上地方の語りの豊かさを誇っていたが、現在の会員は全て昭和生まれである。会員二十二名のうち、語り手は約半数だが、「伝承の語り手」は、男性一名・女性三名である。

会は、創立当初から子ども達への伝承活動を大きな目標にしてきた。新庄市立小学校七校中五校に「伝統文化こども教室」（民話クラブ）がある。会員が語って聴かせ、語りたいという子どもに語りの指導をしている。また、会の行事「新庄みちのく民話まつり」に出演していた子ども達の語りは、県事業「山形ふるさと塾」に引き継がれたので、各学校でも力が入るようになった。塾の発表会の場として「新庄子ども語りまつり」が開催されて十年になる。第十回の昨年は二十名が語りを披露した。

中学校は一校に語りに行っている。また、ある高等学校では、「体験活動・郷土文化コース」の授業の中で、郷土料理と藁細工と民話の体験学習をしている。

しかし、市中心部にある児童数の多い小学校二校では、読み書かせボランティアは受け入れているが、昔語りは断られている。何故かを考えるに、校長先生始め先生方が読み聞かせの体験はあるが、育ちの中で昔話を聴いたことがないので、昔話の良さがわかっていないのではないかと考えている。（注＝その後、同じ校区にある学童保育所で語るようになったとのことである。）

子ども達に昔話を語る時、どの語り手も悩むのが、方言の問題である。現在、子ども達は、暮らしの中で方言を遣わない。その上、方言を日常語として暮らすのは田舎者、共通語で話すのが文化人という風潮もある。だからこそ、方言で語って言葉の文化を遺したい。方言で語って、子どもが理解できなければ意味がないという会員もいるが、そう決めつけてしまってよいのか。繰り返し、何度も語ることで解決するのではないかと思う。朝八時二〇分から二十分間、十五年間語りを続けてきた小学校では、新庄弁が分からないと言われたことはない。伝承するということは、語り続けることではないか、その中から人の情や、助け助けられる世の中だということを伝えていくことに大きな意味があるのではないかと思う。一方で、最近は高齢者への語りが増えている。デイサービスなど高齢者施設へ行くと、お年寄りには方言も民話も懐かしく、身近に感じられて喜ばれている。

会として、県内外の民話の会と交流会を行っている。共通の悩みは、会員の高齢化と後継者の不足、四、五十代の若い会員の入会がないことである。この世代が昔話を聴いた経験がないのは、学校の先生と同じである。方言の問題は、どこの会も悩み

を抱えている。

語りは、聴く相手があってこその対面文芸である。子ども一人ひとりに目と目を合わせ、息遣いをひとつにしながら、一人一話でも生涯忘れることのない昔話に出合って欲しいと願いながら活動している。伝承していくということは、気負わず子ども達に語り続けること、ただ語り続けることであると思う。

最後に「蟹コ昔」（大成一九三　蟹の甲）を語ってくださった。

三　聴く楽しさ、つながる喜びを求めて
大西登貴子氏の報告

大西登貴子氏は奈良県北葛城郡當麻町（現、葛城市）に生まれ育ち、現在も同市在住である。長年、大阪府立図書館に勤務された。氏は、自身が語る昔話・創作・伝説等の素材を「おはなし」といっておられる。

大西氏は、〈「子どもの本とおはなし」関連年表〉（付表参照）を作成して、現代の語り（おはなし）活動を子どもの本に関わる文化史の中で捉えておられる。年表から子どもの本の出版や子ども文庫活動・図書館運動等様々な動きを背景に「おはなし」活動の広がりを読み取ることができる。氏は、明治期において既に、口演童話という形で子どもの本とおはなしの下地があったという。

子ども文庫については、一章で触れたので重複を避けるが、年表から関西圏の母親達の動きは活発で、一九七〇年代初めに各地で次々と「子ども文庫連絡会」が発足していることが分かる。それまでに多くの文庫ができて、活発な活動をしている証左である。子どもの育ちを支える中に、本があり「おはなし」がある環境を母親達が求めたとの認識を示された。以下、氏の報告の概要を記す。

(1)「おはなし」活動について

子ども文庫に関わる人の中に「おはなし」に関心を持つ人は少なくない。七〇年代初頭から始まった「おはなし」活動は、文庫の中で、そして各地に開館された公立図書館の児童サービスの中で広がり続けていった。この時期に開設された（財）東京子ども図書館が「おはなし」活動の広がりと浸透に果たした役割は大きい。七〇年代には、沢山の子どもが文庫や図書館にやって来て、読み応えのある児童書もよく読まれたが、八〇年代、九〇年代になるにつれ、文庫に来る子どもの数は減少していった。そこで、「おはなし会」に子どもがやってくるのを待っているのではなく、子どものいる学校や幼稚園・保育所（園）・児童館等へ出かけて行って「おはなし」を届けるようになっていった。

奈良県には、口承文芸としての語りの伝承はみられないが、上方文化の伝統に支えられた浄瑠璃等の話芸は身近にあった。お寺では仏典童話というようなものも聴くことができた。古代からの伝説が豊かな土地でもある。また、奈良県は口演童話も

盛んな土地柄であった。一九九五年には「奈良県おはなしネットワーク」ができ、県内のグループが交流しつつ、連携した活動が根付いている。

⑵私の「おはなし」をさがして

大阪府立図書館に勤務し、児童サービスに携わる中で、ストーリーテリングに出合った。図書館司書の仕事としてはじまった「おはなし」だが、子どもの本屋さん（「木馬館」大阪市）で行われていた「おはなしの勉強会」に通うのが楽しみだった。自己流に語っていたが、そのうち、テキストを諳記して語ることに居心地の悪さを感じるようになり、自分の言葉にこだわって語りたいと思うようになった。

児童図書館員のための講座で、故野村純一先生の講義を聴く機会があり、「これも語りだ」と言われて節談説経を聴いた時は、幼い頃の記憶―正信偈や説教師の声―が蘇り、そうだったのかと気づき、改めて語りを考える契機になった。

その後、地元で「おはなし」グループ、「當麻おはなしろうそくの会わらべ」を立ち上げた（一九八五年）。我が子にも地域の子どもにも、「おはなし」を聴かせたいと思ったからである。地域でボランティア活動として語りはじめ、現在も続けている。

また、「民話と文学の会」の民話採訪旅行（山形県真室川町）に参加して、伝承の語りと出合った。昔話は暮らしの中から立ち上がるものだと知ったことは、その後の語りに少なからぬ影響を与えてくれた。伝承の語り手から聴いた話の幾つかを自分の言葉で語ってもいる。

縁あって、故郷葛城市の民話掘り起こし事業に携わり、『葛城の行事と暮らし』『葛城のむかしばなし』[7]を刊行することができた。その過程で地域の民話を子ども達に伝えたいとの思いが強くなった。土地の記憶を未来へつなぐ試みと言えるのではないか。伝説を語るためにはどうしたらよいのか、研究者の方に伺いたい。

ストーリーテリング、伝承の語りと、様々な語りに向き合い、その度に色々な人とのつながりがあった。

⑶私の「おはなし、語り」

こうして自分の「おはなし」について振り返ってみると、ストーリーテリングも語りも同じ「おはなし」という言葉に収斂されてくる。その「おはなし」の魅力は、聴き手と語り手とが共有する瞬間、つながる喜びを感じるときである。

「現代の語り手」は、様々な素材を語る。日本の昔話、世界各国の昔話、内外の創作作品、身近な伝説など幅広い。何を語るかによって語り口調も異なる。聴き手である子ども達を取り巻く環境も変わるし、語りの場も変化する。時代と共に変化することもあるし、変わらないこともある。「おはなし」は生きているといえる。

大西氏は、自分の「おはなし」を振り返ると、耳から聴く体験が子ども時代に楽しい経験としてあったので、「おはなし」に本気で取り組めたのだろうと言われた。大西氏には、様々な語

りのサンプルを披露していただく予定だったが、時間の都合で一話の冒頭だけを語ってくださった。

四　「語り活動の現状と課題―小学生への語りを中心に」
立石展大氏の報告

立石氏は、杉並・北・世田谷各区と武蔵野市の小学校や児童館で行われている「おはなし＝語り」の会場を実際に参観してこられ、その様子を映像を使って報告された。語り手に同行して、子ども達と一緒に昔話を聴く体験もされた。次に報告の概要を記す。

一九七、八〇年代には、学校で語ることは容易でなかった。時には、教員との個人的繋がりが、学校で語るきっかけとなった。

教室でおはなしを聴く子ども達
（世田谷区立烏山小学校２年生）

自分の子どもが通っている小学校で語る、子ども文庫で語りを聴いた保護者が学校に働きかける、その評判を聞いた教員が語りを依頼するなどである。また、語りを知った教員が移動先の小学校でも依頼することもあった。近年は、語る場が多くなって語り手が忙しくなり、依頼に応えきれない状況も出ている。

図書館や児童館などでは、聴きたいと思う子どもが集まってくるが、学校では全ての子どもが対象になるので、落ち着いて聴けない子どももいる。そういう子も、聴く回数を重ねるとよく聴けるようになる、と経験を積んだ語り手の言葉が紹介された。ただ、教員と語り手との間に、昔話＝「おはなし」を聴くことの本来的な意義を共有することが難しいこともある。語り手は、昔話を聴いた子どもが昔話の世界を楽しみ、そこから生きる力や心が育つことを願っている。しかし、教員からは、子どもに感想を尋ねたり、授業に直結する成果を期待される場合もあるという。

教員側の発言も報告された。子どもは「おはなし」を聴くことが大好きだと気づいた。絵の助けがないと聴けない子どもが、言葉だけで語られる「おはなし」の世界に入り込んで静かに聴いていることに驚きを感じた、などである。聴いて良かったと満足できる「おはなし会」にするためには、ボランティアと教職員との間で、事前に準備と話し合いが必要だという認識は、学校側にもある。先生が生徒と一緒に「おはなし」を楽しんでいるクラスの子ども達は、総じて良い聴き手であるという。

学校での語りが多くなった背景には、「21世紀を展望した我が

国の教育の在り方について」（第一五期中央教育審議会の答申一九九六年）で「開かれた学校」づくりが提唱されたこと等の意味は少なくない。

図書館と学校との連携について、二例の取り組みが紹介された。

国立市立図書館（東京都）では、「くにたちお話の会」（一九六七年発足。ベテランの語り手が多いことで知られているグループ）との二人三脚で市内の小学校で語っている。この取り組みは、ほぼ三十年間続いており、二〇一四年度には市内の小学校と保育園等述べ一六五クラス、四五〇七人に語った。市立中央図書館長が校長会で説明をしたり、学期始めに学校の予定を問い合わせるなど、きめ細かな対応がなされている。

また日高市立図書館（埼玉県）では、図書館は一館しかないので、市内六つの小学校へ、図書館職員とボランティアが一緒に出かけて「おはなし会」を行っている。院内学級や特別支援学校でも同様に行っている。図書館が「おはなしボランティア養成講座」や勉強会などを行って、ボランティアを募り、常時十数名のボランティアが個人登録している。市内のある小学校で、昨年度卒業した六年生が在学中の六年間に聴いた「おはなし」のリストが資料として示された。短い話もあるが、全部で四七話になる。

リストを見ると一、二年生では日本の昔話が語られているが、中・高学年では、ほとんどが外国の昔話であることが筆者には気になった。語り手を育成する養成講座の最近の傾向についても言及された。

東京子ども図書館主催の「お話の講習会」（一九七四年より）と、小澤昔ばなし研究所主催の「昔ばなし大学」（一九九二年より、全国各地で開催）である。受講応募者にみる最近の傾向は、前者では、始めの頃は文庫関係者が多かったが、近年はおはなしボランティアの方が増えており、高齢者も増加している。後者でも、受講生は読みきかせボランティアをしている女性が多い。「語り手たちの会」については、大島廣志氏「『語りの養成』の今」（「伝え」第54号　二〇一四年三月）を参照されたい。

学校での「おはなし会」は、教員にとっては方言や伝統文化の継承の問題、子どもの心の成長を支える「おはなし」の力について考える契機となるのではないか。おはなしボランティアを受け入れるには、教員が昔話の語りを聴く体験をすることも大切だが、これは教員養成のあり方とも関わってくる。学会としても考えてみる問題であるかと思う。

三氏の報告の中で、「昔話」または「昔話を語る」を意味する言葉は、「昔話」「民話」「おはなし」「語り」など様々に遣われているが、それぞれの立場を尊重して、敢えて用語の統一はしなかった。この用語の多様さからも現代の語り事情が窺えるのではないだろうか。

五　聴くことの意義

「新庄民話の会」が行う子ども達への語りの指導は、おおらかだ。民話クラブは学校の授業の一環としてあるので、先生の指導の下に、子どもたちは昔話の本を読んで自分で選ぶ。ほとんど新庄・最上地方の昔話である。「民話の会」会員は、子どもが覚えて語るのを聴いて、助言をする。言い難くそうな言葉は、言い換えてしゃべりやすい言葉を教えるくらいで、細かいことは言わない。聴くことが勉強だと、常に言っている、とのことである。子ども達が語るのは、敬老の日や公民館祭りのほかに、こんな時もあるそうだ。夏休み中に学校で合宿があるが、この時、子ども達は近所の家にお風呂をもらいに行く。そのお礼に昔話を語るのだという。何とも微笑ましい。

「民話の会」も「おはなしグループ」も〝子どもは誰も昔話を聴くことが好き〟という了解に立っての活動であると思う。「現代の語り手」達は、長い活動を通してそのことを確信した。立石氏の報告にもあったが、落ち着きがなく、動き回っているような腕白な子どもが、良い聴き手になることは、しばしば耳にする。また、「おはなし」が始まると、子ども達がその世界に入り込んで不思議な体験を感じ、終わるとふっと現実に帰ってくる、そんな経験は語り手を喜ばせて、語り続ける力になる。

渡部氏から感動的な逸話を伺った。ある小学校へ朝の二〇分間、隔週で語りに行くことになった。二学年が合同で聴くのだが、三、四年生の中に、常に動き回っている児童がいるので、どうしたらよいかと思案した先生が、毎週渡部さんに語ってもらいたいと提案された。語ってみると、その子はじっとして聴いている。秋になって「三枚のお札」を語ったところ、その子が段ボールと画用紙を使って、包丁を研ぐ山姥と囲炉裏端に居る小僧の場面を作ったという。氏の昔語りが子どもの心に響いたのだろう。そのような計らいをした先生も素晴らしいが、昔話が子どもの心に及ぼす力を目の当たりにした思いがする。

「昔話は聴く相手があってこそ」「聴くことが大事」「耳から聴く体験が子ども時代に楽しい経験としてあった」「教員が昔話を聴く体験」―三人の報告の中で、何度も出てきた〈聴く〉という語に連なるフレーズである。昔話を聴いた幼児体験はないと思っている「現代の語り手」も、語り続けるうちに、自分の記憶の奥に幼い時に聴いた声や言葉に気づく。その記憶が、語る力の基になっていると思われる。

ところで、「現代の語り」について学び始めた時期は、口承文芸学界においては、語り言葉を翻字した、優れた昔話資料集の刊行が相次ぎ、本学会が創立した時代でもあった。この頃に「伝承の語り手」と「現代の語り手」が出会っていたら、「現代の語り手」が「伝承の語り」を聴いていたら、どんな影響を受けたであろうか。接点が持てなかったのは、まことに残念である。

昔話は口から耳へ、耳から口へと伝えられた口承文芸であれば、「伝承の語り」が自然で本来的な語りであるはずだ。その語りがどういうものかは、土地の空気を吸い、伝来の食べ物を食し、語り手に向き合って、頷きながら聴きたい。大西氏が、採訪で出会った語り手のことに言及したのは、このことである。

故野村純一氏は、「現代の語り手」達に「伝承の語り」を聴くように勧めて、佐渡への採訪を指導された。それは、「都会の中で作りあげた言葉で、口頭伝承としての昔話を語ったり、継承していくというのは、いつかはどこかで大きな壁にぶちあたる時をむかえるのではないか。そういう危惧を感じ」[8]るから、と。

筆者も仲間の語り手達と共に、山形県真室川町の語り手の方々を何度か訪ねた。大西氏の報告にもある土地である。そこで語りを聴いた人の誰もが感動し、楽しくも強烈な印象を与えられた。

「伝承の語り手」を都会へ招いて語りを聴く企画もある。多くの人が聴くことのできる良さはあるが、土地の力や暮らしの匂いを捨象して、昔語りの面白さだけを求めることのないよう、心しなければならないと思う。

長期間に亘って語り続けている「現代の語り手」は多い。二、三十年はおろか四、五十年も経験を積んだ語り手もいるので、素晴らしい語りを聴くことも、先達に学ぶこともできる。新人の語り手がパフォーマンスに傾きやすいという懸念の声もないではないが、全体の水準は上がっていると思われる。

良い聴き手が良い語り手になるといわれる。良い語りを聴くことが大切だともいう。特に、子ども達には優れた語りを聴かせたい。昔話を聴いた子どもが、全員語り手になるわけではないし、将来、何人の子どもが語るようになるのかは分からないが、まず聴くことがその第一歩であることは間違いない。

近年、乳幼児とその親を対象にした「おはなし会」が盛況である。赤ちゃんや幼児に聴かせると同時に、お母さん（お父さんも）が「おはなし」や本を好きになるきっかけになればよいと考えて、活動を続ける語り手もいる。聴き耳を育てる意味は大きい。

六　地域に根ざすおはなしグループ

付表の年表からは、色々なことが読み取れる。子どもの遊びを質的に変えたゲーム機が、登場した年を調べてみた。任天堂が、一九八〇年にゲームウォッチを、八三年にファミコンを発売した。以後ソフトが次々と売り出されて、子ども達を熱中させた。小学校上級生が子ども文庫に来なくなった時期と余りに符合するので驚いた。

加えて、八、九〇年代はいじめや不登校問題が出現し、子どもを取り巻く環境に変化が現れた。そのような社会的状況から文部科学省も対応を模索し始め、立石氏のいわれた「開かれた学校づくり」につながる動きが出てきた。そのような社会の状況に意識的だったかどうかは分からないが、「おはなし」活動は続

けられ、広がりをみせていった。

「現代の語り手」が、子どもに「おはなし」を聴いて欲しいと願うのは、第一に「おはなし」＝昔話を聴くことは楽しいことだからという答えが得られると思う。無心に聴くうちに、子どもは、昔話に込められたメッセージ――生きる勇気や困難を克服する力――を受け取るだろう。また、映像やＩＴ器械を通した音声に囲まれた現代であるからこそ、生の言葉で語られる語りを大切にしたい。何故なら、肉声の言葉こそ、人の心を育てるものだから、と。

子どもと本を結ぶために始まった「現代の語り」活動ではあるが、数十年語り続けてきた語り手達は、語り＝聴くことの本来的な喜びに気づいていった。子どもに語るためだけでなく、大人も「おはなし」の魅力に捉えられたといえよう。

立石氏から、全国規模の語り手養成講座についての報告があったが、小規模の語り手養成講座は各地で行われている。主催者は公民館や図書館、自主団体等いろいろだが、語りを始めたきっかけは、講座に参加してという語り手が多い。

「おはなし」を知ってもらい、その担い手を増やす意図を持って行われる場合もある。そのための自主グループ主催の養成講座の呼びかけ文を見てみよう。

「子どもたちに直接語りかけるおはなしは、子どもの心に深く働きかけ、生きる力をつける手助けをしてくれます（立川地域文庫連絡会おはなしボランティア主催の養成講座募集ちらしから）。「幼い日おはなしをしてもらった人は、その幸せを一生忘れないといいます（世田谷区のおはなし泉主催の養成講座募集ちらしから）。

どちらも子どもの心の成長にとって大切で素敵な働きがあると地域の人々に呼びかけている。

次に「ねりまおはなしの会」三十周年記念誌『あゆみとひろがり』（二〇〇九年）を見てみよう。「はじめに」には、この会の誕生に関わった講座の指導者である故小河内芳子氏[9]のすべての家庭に語りの楽しみをという考えを会員が共有して、「私たちが子どもに語り、それを聞いた子ども達がまたその子に語り、というふうに、伝承の語りとは違う、新しいかたちのおはなしが、継承され広がっていくことを願って、これからも子どもたちにおはなしを届けていきたいと思います」と述べている。この会は、練馬区全域で語っているが、語りの今だけではなく、将来共に継続発展させたいとの決意が感じられる。

また、昨年三十周年を迎えた「ＮＰＯ法人まちだ語り手の会」（東京都町田市）は会則に〈この会は、〝肉声でおはなしを語ること〟を通して「心豊かなひととき」を子どもたちと共有し、地域社会の向上を図ることを目的とする〉と記し、明快に地域社会に目配りしていることを指摘しておきたい。会員達の力で『語って聞かせる　町田の民話』（二〇〇九）を刊行し、今続編に取り組んでいる。ＮＰＯ法人化したのは、地域を見据えた活動が継続して行われるためといい、子ども達が暮らす地域の教

育力や生活環境の向上にまで言及している。

これらの引用文からは、「現代の語り手」が目指しているのは、現在を見据え、将来を見通す地域文化の実践活動といえるのではないだろうか。

七　語り活動のこれから

「民話の会」など「伝承の語り手」達のグループ活動の目的は、自分達の祖先から伝えられた、故郷の民話を伝承するためと明確である。地域社会の豊かな文化を育むという大枠は同じでも「現代の語り手」達の活動とは異なる文化的背景があることが分かる。同じ地域にあっても、「民話の会」と「おはなしグループ」が一緒に活動することはないという。研究例会に参加しておられた「鳥取・民話を語る会」の小林達雄氏からも、鳥取県で「現代の語り手」達と一緒に活動する例は聞けなかった。幾人かに尋ねてみたが、やはり、「民話の会」と「おはなし」グループが協力して活動することはないだろう、という意見が多い。

そんな中、宮城県では、「みやぎ民話の会」の肝いりで二〇一五年に「泉南地方の民話交流のつどい」が行われたことを教えられた。昨年は二回目で、県内に広く呼びかけて行ったところ七グループ八〇人が集まった。三グループに別れての語りあいと小野和子氏（みやぎ民話の会創立者、現顧問）の講演という内容で行われた。県内のいろんな語りを聴き、好評だったという。このような「つどい」を重ねることで、様々な性格の会が協同し、刺激し合えば、何か新しい展望が見つかるのではないだろうか。

子ども文庫やおはなし会で語りを聴いた子ども達の中で、大人になってもその話やおばさん（語り手のこと）を覚えているのだろうか。覚えていると言う成人した子どもとの出会いは、想像以上に多い。さほど大きくない都市（人口一五万人位か）で、二、三十年活動している人に多いようだ。子どもは、「おはなし」だけを覚えているのではなく、それを語ってくれた人の記憶と一緒に覚えているものだから、出会いの条件もあるのかもしれない。

耳に残る語りの声や言葉は生きて記憶される。その命をつなぐために、語り手達は、共に語り、子ども達の耳を養い続けるであろう。

注

（1）一九五八年に、アメリカ留学から帰国した渡辺茂男らによって、児童図書館員らに教示された。詳しくは、拙文「現代の語り」『こえのことばの現在―口承文芸の歩みと展開―』二〇一七　日本口承文芸学会）を参照されたい。

（2）子ども文庫は、家庭文庫と地域文庫と区別することもあるが、実際の営みは同じなので、ここでは併せて子ども文庫という。文庫にはそれぞれの個性があり、各々の顔を持つ

といわれている。前掲拙文参照。

（3）全国子ども文庫調査実行委員会『子どもの豊かさを求めて3――全国子ども文庫調査報告書――』社団法人日本図書館協会　一九九五

（4）届け出も決まりもない自主サークルなので、統計を取るのは難しいが、二〇一三年度全国読書グループ総覧（公益社団法人読書推進運動協議会）所収のアンケート調査のうち、子どもの本に関わり、実演を行っているグループをみた。図書館を通した調査であり、あくまでも、筆者による控えめの推定である。

（5）「民話」第40号　東北文教大学・東北文教大学短期大学部民話研究センター　二〇一六

（6）花部英雄「被害記憶の形象と継承」『口承文芸研究』三九号　日本口承文芸学会　二〇一六

（7）共に葛城市民話編集委員会編　葛城市立図書館二〇〇八）

（8）野村純一「講演録昔話の語り手―佐渡の語り手を中心として―」（『語りの世界』創刊号　一九八五　語り手たちの会）

（9）図書館司書として、昭和初期から日本の児童図書館の充実発展に努めてきた。戦後は、児童図書館研究会会長として後進を育成した。

（すぎうら・くにこ／昔語りの実践と研究・ふきのとう）

付表「子どもの本とおはなし」関連年表

日本口承文芸学会　第 70 回例会：2016/03/26
於：高千穂大学　作成：大西　登貴子

1887（明治 20）	『西洋古事神仙叢話』（グリム童話の日本への最初の紹介：翻案）
1891（明治 24）	少年読み物『こがね丸』（巌谷小波　博文館　明治 24）
1896（明治 29）	巌谷小波　口演童話の試み（岸辺福雄の口演童話もこの頃）
1903（明治 36）	久留島武彦　第一回お伽噺の会
1904（明治 37.2）	大阪図書館開館
1906（明治 39.3）	帝国図書館開館
1908（明治 41.11）	東京市立日比谷図書館開館（児童室：8 歳以上）
1910（明治 43）	『遠野物語』（柳田國男）
1914（大正 3）	月刊少年雑誌『少年倶楽部』創刊：大日本雄弁会（現講談社）～ 1962（昭和 37）
1916（大正 5）	『お話の研究』（水田光　大日本図書）
1918（大正 7）	幼年雑誌『赤い鳥』創刊（鈴木三重吉）
1922（大正 11）	絵雑誌『コドモノクニ』創刊（東京社）
1924（大正 13）	『注文の多い料理店』（宮澤賢治）
1927（昭和 2）	文芸春秋『小学生全集（全 88）巻』（1927-29）
1927（昭和 2）	児童文化叢書：アルス『日本児童文庫（全 76 巻）』（1927-30）
1936（昭和 11）	「講談社の絵本」刊行開始
1940（昭和 15）	『熊のプーさん』（石井桃子訳）岩波書店から刊行

1946（昭和 21）	「日本児童文学者協会」結成
1947（昭和 22）	『ノンちゃん雲に乗る』（石井桃子作）大地書房から刊行
1948（昭和 23）	国立国会図書館開館
1950（昭和 25）	**「岩波少年文庫」創刊**
1950（昭和 25.4）	**「図書館法」公布**
1951（昭和 26）	坪田譲治「びわの実学校」創立
1952（昭和 27）	「民話の会」結成
1953（昭和 28.3）	「日本児童図書出版協会」設立
1953（昭和 28.10）	「児童図書館研究会」（児図研）発足
1953（昭和 28）	**「岩波子どもの本」創刊**　12 月『ちびくろさんぼ』他刊行
1953（昭和 28.2）	テレビ放送開始
1954（昭和 29）	「赤胴鈴之助」（『少年画法』連載開始、ラジオ放送 1957-1959）
1956（昭和 31.3）	**「こどものとも」（福音館書店）刊行開始**
1957（昭和 32）	「家庭文庫研究会」結成：石井桃子、土屋滋子、福田直美、村岡花子、村岡みどり⇒ 1960（昭和 40）に、児図研に合流
1958（昭和 33）	石井桃子　自宅で「かつら文庫」開く
1958（昭和 33）	渡辺茂男、児図研機関紙「こどもの図書館」にてストーリーテリングを連載・紹介
1959（昭和 34）	『週刊少年サンデー』（小学館）創刊、『週刊少年マガジン』（講談社）創刊
1959（昭和 34）	『だれも知らない小さな国』（佐藤さとる作　　講談社）出版
1960（昭和 35）	『子どもと文学』（石井桃子、瀬田貞二、鈴木晋一、松居直、いぬいとみこ、渡辺茂男）中央公論社より刊行
1960（昭和 35.5）	鹿児島県立図書館「母と子の 20 分間読書運動」開始
1960（昭和 35）	民話を再創造した『龍の子太郎』出版　（松谷みよ子作　講談社）
1961（昭和 36）	石井桃子、トロント市立公共図書館での「お話大会」に参加
1962（昭和 37）	間崎ルリ子、アメリカから帰国し、「児童図書館研究会」等でストーリーテリング実演
1962（昭和 37）	『少女フレンド』（講談社）創刊
1963（昭和 38）	松岡享子、アメリカから帰国、翌年より大阪市立中央図書館で「お話の時間」開始
1963（昭和 38.12）	『ぐりとぐら』（中川李枝子作　山脇百合子絵　福音館書店　こどものとも）発行
1963（昭和 38）	『マーガレット』（集英社）創刊
1963（昭和 38.3）	『中小都市における公共図書館の運営』（中小レポート）日本図書館協会から刊行
1965（昭和 40.5）	**『子どもの図書館』（石井桃子著）岩波新書刊行**
1965（昭和 40.9）	日野市立図書館　BM ひまわり号　貸出業務開始
1967（昭和 42.4）	「日本親子読書センター」設立
1967（昭和 42.10）	「日本子どもの本研究会」　発足
1968（昭和 43）	『週刊少年ジャンプ』（集英社）創刊
1969（昭和 44.6）	ねりま地域文庫読書サークル連絡会（東京）発足
1969（昭和 44.8）	第 1 回全国子どもの本と児童文化講座（日本子どもの本研究会）開催
1970（昭和 45.1）	「子どもの本棚（月刊）」日本子どもの本研究会　創刊

1970（昭和 45.4）	「親子読書・地域文庫全国連絡会」（親地連）発足
1970（昭和 45.7）	「雨の日文庫」（大阪府松原市）開設
1971（昭和 46.4）	『日本昔話百選』（稲田浩二編著　三省堂）
1971（昭和 46.5）	豊中子ども文庫連絡会　発足
1971（昭和 46.10）	「土屋文庫」（土屋滋子主宰）、「松の実文庫」（松岡享子主宰）、「かつら文庫」（石井桃子主宰）を母体にして**「東京子ども図書館設立準備委員会」発足、月例「お話の会」はじまる**
1972（昭和 47）	大阪府内（7 月「枚方子どもの本をひろめる会」、8 月「寝屋川子ども文庫連絡会、9 月「松原子ども文庫連絡会」発足」
1973（昭和 48.4）	『おはなしのろうそく　1 ～』刊行開始（東京こども図書館）
1973（昭和 48）	「民話の手帖」（日本民話の会）、「月刊絵本」（盛光社）、「子どもの館（福音館書店）等創刊、児童書専門店「メルヘンハウス」（名古屋）開店
1973（昭和 48.9）	『ストーリーテラーへの道』（ルース・ソーヤ著　日本図書館協会）
1974（昭和 49.1）	**「東京子ども図書館」公益財団法人の認可を受ける**
1974（昭和 49.5）	大阪府立夕陽丘図書館開館（翌　昭和 50 年 7 月児童室を開室）
1974（昭和 49.12）	『季刊　民話』（民話と文学の会）創刊
1975（昭和 50）	伊藤忠記念財団　子ども文庫助成事業を開始
1975（昭和 50）	「まんが日本昔ばなし」 放送開始
1975（昭和 50	『日本昔話集成　全 6 巻』（関敬吾　角川書店）
1976（昭和 51.6）	「大阪府子ども文庫連絡会」（大子連）結成
1976（昭和 51.11）	児童書専門店「木馬館」（大阪市）開店
1977（昭和 52.12）	「語り手たちの会」 創立
1977（昭和 52）	『民話と文学　創刊号』～ 2010.3（民話と文学の会）
1977（昭和 52）	『日本昔話通観　全 31 巻』（稲田浩二　小澤俊夫責任編集　同朋社）～ 1998
1978（昭和 53）	『日本昔話大成　全 12 巻』（関敬吾　角川書店）～ 1980
1979（昭和 54）	国際児童年
1980（昭和 55）	「児童図書館員養成講座（第 1 回）」日本図書館協会開催
1984（昭和 59.5）	大阪府立国際児童文学館　開館（⇒ 2010 年　大阪府立中央図書館へ引き継ぐ）
1985（昭和 60.10）	『ストーリーテリング』（野村純一　佐藤涼子　江森隆子　弘文堂）
1986（昭和 61.10）	東京子ども図書館　児童室を開設
2000（平成 12.5）	国立国会図書館子ども図書館開館（東京）
2000（平成 12）	子ども読書年
2001（平成 13.8）	ブックスタート支援センター　設立
2001（平成 13.12）	「子どもの読書活動の推進に関する法律」公布
2005（平成 17.7）	「文字・活字文化振興法」施行

参考資料：『子どもの本を読む会　３６年の記録』（同編集委員会）、『ひみつの王国　評伝石井桃子』（新潮社）、『ストーリーテリング』（弘文堂）、「国立国会図書館子ども図書館」HP　等